



中学校体育祭

阿久比町では、平成十七年十月二十八日に「阿久比町幼・保・小・中一貫教育プロジェクト」を立ち上げました。

町には阿久比中学校一つしかないという利点を生かし、九つの幼稚園と保育園、四つの小学校、阿久比中学校のカリキュラムに一貫性をもたせ、四歳から十五歳まで一貫した保育・教育を行おうというものです。

シリーズ 一貫教育 プロジェクト 幼・保・小・中



小学校の授業

地域の方の協力を得て、〇歳から十五歳まで一貫した保育・教育の実現をも視野に入れていきます。

このプロジェクトについて、シリーズを組み、「広報あぐい」で定期的に町民の皆さんにお知らせします。

一 プロジェクトの背景

今日の学校教育では、各学校が特色ある教育を展開し、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」を育成することを基本的なねらいとした教育の実現を目指しています。

小学校から中学校に進学する段階

での子どもたちの現状をみると、夢と希望をふくらませ、新たな再スタートを決意する反面、校則や学習内容、指導方法などに大きな違いがあることから、不安や戸惑いを感じ、心理的ストレスとなる子どもがいます。

小学校で認められた個性や能力、興味や関心を継続して伸ばしにくいなどの課題があることも指摘されています。

「義務教育に関する意識調査」(平成十七年三月に荻谷剛彦東京大学大学院教授らが全国三万六千人の児童・生徒・保護者・教員などを対象として行った調査)の結果では、小学校六年生から中学校一年生に学年が変わると算数・数学が好きと答えた割合が二十六%ほど減り、総合が

好きと答えた割合が十二%ほど減ると報告されています。「中一ギャップ」の深刻さに警鐘を鳴らしています。

続いて、阿久比町の小中学校でも見られる課題を紹介します。

義務教育最終段階、中学校での教育のあり方が注目を浴びることが多いのですが、問題行動などについて事例研究してきたところ、幼少期からの教育のあり方が重要であることが明らかになってきました。

少子化、核家族化に加え、個性を尊重しすぎたため、自己中心的な人間が増え、他人の目を気にしないだけでなく、他人に迷惑をかけていることすら気づかない人間が増えていきます。

